

氏 名	奥 地 正 おく ち しよう
学 位 の 種 類	農 学 博 士
学 位 記 番 号	論 農 博 第 469 号
学位授与の日付	昭 和 48 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	国有林における労働組織の形成と展開 —東北国有林を中心に—
論文調査委員	(主 査) 教 授 半 田 良 一 教 授 三 橋 時 雄 教 授 寺 崎 康 正

論 文 内 容 の 要 旨

この論文は、明治以後現在に至るまでの国有林における林業労働組織および労働者の性格の実態と、政策の展開過程とを、東北とくに秋田営林局管内国有林を主な対象として、実証的に究明整理したものである。

論文は4章から成る。第1章・第2章は、戦前の国有林労働者の性格に照応して形成された労働組織の生成と展開について論述する。東北地方の林業労働者は一般に半農半労型の性格で、労働組織は部落組織との結合が強い。一方国有林側でも、慣行特売制度・委託林制度などの地元対策を活用して、部落組織の温存に努めた。育林労働の実行形態は地元部落による請負いが通例だったが、そこでの労働関係は契約というよりも恩恵と義務の關係に律せられたもので、労働報酬も低水準にとどまった。

つぎに伐出労働については、元來経営外の労働組織だった「小屋司」・「山頭」が、国有林直営生産の本格化に伴って管理機構内に包摂され、大正中期以降には新たに、「工程頭」制ができて、管理機構の外側で労働者を組織する機能を担った。その主たる権能は、作業員の募集調達と賃金格付けである。さて工程頭は、いわゆる「組頭制度」の一形態で、中間搾取的要素を含むことは否めないが、従来の論者が「組頭」に通有の性格として強調したような、前期的労務供給仲介人の色彩は稀薄である。反面、東北農山村の特徴として地縁的固定的な労務供給が主体を占めるので、部落組織との關係が密接である。そして国有林側も、その安定を図るために、部落単位に「森林労働団」を設けて工程頭を部落委員に任命するなどの措置を講じた。

第3章・第4章は、戦後における国有林労働者の変質と労働組織の近代化過程を追求する。戦後労働者の法的地位が改善され、国有林でも国有林野事業作業員就業規則が制定されたが、それを契機に直営・直備の事業形態が滲透する。また部落の性格も変化し、旧來の半封建的な土地利用組織・労働力供給組織という色彩が稀薄化して、機能集团的要素の比重が高まる。育林労働には直備と請負いとの両形態がみられるが、戦前に比べて直備の比重が大幅に増した点、および請負いの単位が部落組織から切り離された点に、

近代の労働関係への傾斜が認められる。

また伐出労働については、功程頭に代わって班長が労働組織の中核に位置する。しかし、一方では経営合理化の一環としての管理強化、他方では労働者の意識の向上によって、功程頭に随伴したような中間搾取的性格は、班長にあっては殆んど払拭されている。

以上のような労働関係の変貌に照応して、最近では、伐出労働者に関するかぎり専業労働者が大半を占めるに至った。そして通年常備化の追求が、国有林側にとっても労働者側にとっても、等しく基本的課題として登場することになった。

論文審査の結果の要旨

林業経営の成立とその資本主義化という課題は林業経済研究の中心課題であるが、それを究明する上に、林業労働の存在形態の解明は重要な鍵であろう。この論文は、明治以後現在に至るまでの国有林における林業労働組織および労働者の性格の実態と、政策の展開過程とを、東北とくに秋田営林局管内国有林を主な対象として、豊富な資料を駆使して実証的に究明整理したものである。

一般に林業労働の性格の特徴として、封建性の残存が指摘されている。この封建性は、労働組織内部における収奪関係と、労働力供給にまつわる部落規制との両面において現われるが、従来の林業労働研究は、とくに前者に関する事例の検証を通じて、前期的性格を固有のものとして強調しているものが多い。また労働力結合の態様を規制する林業技術に関する考察が、がいして稀薄であった。これに対して本論文は、次の諸点においてこの分野の研究を大きく前進せしめた。

(ア) 明治後半の国有林形成期から現代に至るまでの林業労働組織の生成・発展・変質の過程を歴史的に明らかにし、育林労働・伐出労働それぞれについて、戦前における「封建性」の根拠を討究するとともに、戦後はかかる要素が払拭されて近代の労働関係へ転化したことを指摘した。

(イ) 林業労働にまつわる前期的要素を、とくに析出母体たる部落組織と労働組織との補合的關係に着目して解明を試みた。とりわけ、専業労働者が少なく半農半労型の農民が多いという地域性をもつ東北山村を研究対象としたことにより、この補合關係の存在と、それを温存し利用しようとした国有林側の政策姿勢とが明らかになった。

(ウ) 労働組織近代化の契機として、戦後のわが国の経済構造の変質の中において国有林が地主的経営から資本家的経営へ脱皮したことに注目し、経営合理化の諸施策が労働関係の近代化と林業労働者の専業化とを促している過程を追求した。

(エ) 育林・伐出・運材の各分野において、技術の発展と労働組織とが相互規定的關係のもとに展開した様相を、詳しく検討した。

本論文は、東北の国有林を直接の研究対象にしてはいるが、林業労働力の析出基盤、林業経営の性格、林業技術の構造など広汎な視野に立脚した実証的研究で、その論証過程と結論とは、今後の林業労働研究ないし林業経営研究に寄与するところがきわめて大きい。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。